

宮森 敬子展『表面なるもの』

Thu. 23 Apr. - Fri. 15 May, 2015

■オープニングレセプション 4/23(木)18:00-20:00



宮森敬子個展に寄せる

五十殿利治（筑波大学教授）

文学ならば「読者」ということばがある。この読者には一般読者から専門家的な読者まで、多様多層であろうが、そもそも決定的なヒエラルキーがない。ひるがえって、現代美術、あるいは現代アートでもいいのだが、この読者にあたる人間をなんというだろうか。「観客」というと、演劇とかパフォーマンスの方がふさわしい。「観衆」というと、「大衆」を結びついて、個人的な営みとは別の位相を連想させてしまいそうだ。音楽の場合はどうか。観衆に対応するように、「聴衆」ということばがあるけれども、やはり「衆」という語が複数性と結びつくだろう。どうしても絵や彫刻の前に立つ私的、個人的な鑑賞を前提とした享受者を言い表す適切な語がなかなか浮かばない。

もっとも、読者という語で連想される黙読する読書行為が普及するのは、近代であることはよく知られている。それまでは音読が普通であった。いや近代の絵画も負けていない。明治初年の浅草の「油絵茶屋」では見世物小屋らしく口上があったらしい。時代をさらに下るなら、丸木位里、俊の「原爆の図」も作家自らの真に迫った絵解きがあった。

私は文学でいえば、宮森敬子作品の「いい読者」ではないのに、と冒頭で断りを入れようとしただけなのだが、それが迂遠な方へ逸れてしまった。作品を語る語の貧しさは端的にわが浅学非才の因果に帰着するだろうが、一方で作品を見る人間を言表する語ひとつ満足にみつからないというのは、個人だけの問題ではない、作品を生み出す作家ばかりに意を注いで、おそらく観者という語くらいしか用意できていない批評言語の歴史にかかわる。その貧しさを笑いたいわけではないし、笑えるような、安穏な高みに自分がいると勘違いもしていない(はずだ)。

宮森敬子作品についてなにかを書くのは、これが2度目となる。いまから20年ほど前のこと、1996年に水戸芸術館で当時の渡部誠一学芸員が情熱的に担当した展覧会『いばらきバイアニュアル デialogス1996 現代性の条件』に、若手として宮森敬子と近藤歩を推薦した関係で一文を草することになって以来のことだ。執筆時、宮森は米国滞在中だったが、まさかその後米国が拠点となるとは思い寄らなかったし、ましてその拠点もフィラデルフィアからニューヨークに転じて、今日まで制作を続けるとは想像だにできなかった。むろん宮森自身もそのような計画を入念に練り上げて渡米したわけではないだろう。

今度の個展は、ひとつの作品のまとまりとして、この20年とは何であったのか、そして何でなかったのかを、みせてくれるだろう、といえ宮森敬子には酷なことだろうか。無責任でそういうのではない。彼女の小さな個展を筑波大学の小さなギャラリーで見て以来のことだが、宮森作品が自ずと作家の現在(そして過去)を語ることを疑っていないからだ。

かつて20年ほど前に、私は宮森敬子紹介文をこのように結んだ——「私は予言者ではないので、宮森敬子の将来を占うことはしない。ただ、その「必然の方向」にすすむ、あるいは導かれるならば、表現者としての信頼を失うことはないということはある。」(「壁」から「門」へ——宮森敬子試論)、「デialogス」展図録)

展覧会后、宮森敬子とはぼつりぼつりと出会う機会があった。つくばのわが家で、そして一昨年と昨年にはマンハッタンで。だから、私はこのことばが死語となっていないことを確信しており、その確信を今度の個展で来場した「観者」ではなく「観衆」と共有できればと願う。

作品1



《Arizona Dream #3》, 2014

小枝, 石, 和紙, 木炭, 胡粉, 銅板, 鞣革

箱 13.7 x 19 x 2.8 (cm), サイズ組み方により自由

アリゾナドリーム(Arizona Dream #3)は、2013年の12月にアリゾナ、ユタ、ニューメキシコまでを旅した時に、旅の途中4カ所から採集した小枝、石にそれぞれの場所で採集した樹のロビングを貼りました。(それぞれの採取場所も書いてあります)

ネイティブインディアンの方にとって、4という数字は意味があるそうです。アメリカの大地を旅して、様々な人種が過ごして来た時間、美しさ、醜さを含んだ人間の歴史や宗教の行い、それを受け止めて来た自然の大きさ等を感じました。箱の中にあるピースはピラミッドの様に組むことができます。

作品2



《BOX_Semi-Sweet Baking Chocolate Bar 夜は昼に》, 2015

使用済み紙箱, 樹皮, 和紙, 木炭, 胡粉, 藍, アクリル, 金箔(23.75K)

箱 15.3 x 7.5 x 1.8 (cm)

この作品には "夜は昼に" (Night becomes Day)という副題がついています。1998年に発表した椅子と椅子を木の枝で繋いだ作品に付けた題名と同じです。

静かな藍色と白のグラデーションで作品の表面を着色しています。私は平面作品以外では自分のロビングに着色することはあまりありませんが、今回は思うところがあって藍をもう一度使ってみました。

暗い夜も朝が来て明るくなり、忙しい昼は静かな夜に戻って行きます。小さな私たちの日常は、その繰り返しで儚くも思えますが、それは永遠とも呼べる何かの一部であるかもしれません。日々の表面—それを作品に出来ればと思いました。つらいこと暗いことも明るくなるときが来ますように。

作品3



《BOX_S.O.S》, 2015

使用済み紙箱, 17本の小枝, 和紙, 木炭, アクリル, 胡粉, 金箔(23.75K)

箱 13 x 8 x 6 (cm), サイズ組み方により自由

S.O.S というのはアメリカで有名なキッチン用スチールウールのブランドです。フライパン等焦げ付いたときに使うものです。この作品にはその使用済み紙箱を使っています。

箱の中には私が主に歩き回っているエリア、セントラルパーク、マンハッタンやブルックリンの道端で拾った17本の小枝が入っています。小枝は拾ってから(しかるべきプロセスを経て)和紙でくるまれます。和紙は私が旅行して集めたスタジオ内のロビングコレクションの中から選んでいます。アメリカの各地、アフリカやオーストラリア、日本のものもあります。

箱の中は金箔で飾ってあり、外側の表面は一寸でこぼこした白に見えます。元々あった白の部分は残して、白くないインクの表面を白い絵の具で丁寧に覆っていきます。そうすると、表面の文字のインフォメーションが見にくくなるので箱の形が主人公になります。それでも近寄って表面をよく見ると、まだ文字のインフォメーションが読み取れます。一定の距離からはそれが見えなくなります。(宜しければ実際にやってみて下さいね。)

実は作品2で紹介した《BOX_Semi-Sweet Baking Chocolate Bar 夜は昼に》の箱もこのテクニックを使っています。ですから題名のとおり、作品2はセミスイートのベーキングチョコレートの箱を使っていた訳です。

私の今回の作品はこのシリーズが何点もあります。一時を過ごした時間と場所、身の回りにある“表面”について意識してみた作品です。

ドローイング作品

《雲の影》, 2015

9x13.4cm, トレーシングペーパー, 色鉛筆

スタジオの窓から隣のビルに移っている雲の影を見ていると、ビルの表面をなぞる様に影が変化して行きます。どっしりとしたビルの表面が劇的に変わって行く様子が面白く感じられてドローイングしてみました。定かな形はない雲ですが、影にはしっかりした存在感があるように見えます。私たちが見ている表面というものは、実際は雲の影のようなものかもしれません。



作家ステートメント / artist statement

和紙で樹をくるんで、その上を手製の木炭でこする(ロビングする)と、それぞれの木肌のパターンが写しとられる。その和紙で身のまわりにあるものたちを包むと、たとえ違った場所やべつべつの種類の樹から写しとられたロビングを使っても、ある統一感が生まれる。

わたしの周りをぐるりと囲んだ、さまざまな表面を意識してみる。表面というのは、世界を経験する一つの手がかりとなる。

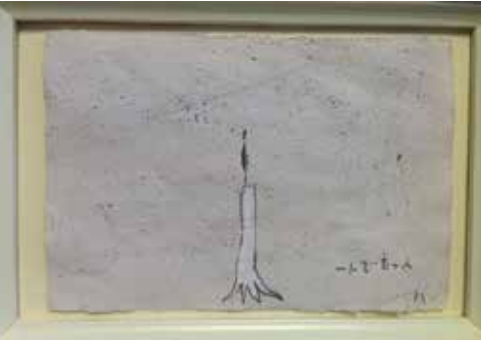
時間層と空間層の中の薄っぺらな表面を意識する。同時に、透明な、しかし存在感のある、わたしの周りの厚み、あるいは、数えきれない波となってわたしをつないでいる、その驚くべき速度を想像してみる。そうしているうち、わたしの表面は他の表面とつながって、その一部のようにになる。それは体の内部にも浸透して、わたしは一つのつながりを感じることもできる。

和紙の繊維と透明感、また木が焼かれていくにおいて、人工的な透明プラスチックを使って制作をしている。また近年は、石ころや人工物の破片を集めている。うすっぺらな世界であっても、その表面にへばりついているわたしたちは、より深い、なにものかの一部であるはずなのである。

宮森敬子は大学時代日本画を専攻、大学院卒業の年に現代絵画の賞である三木多門賞を受賞し渡米し、その後は文化庁在外研修員としてアメリカ東海岸フィラデルフィアにあるペンシルバニア大学に1年間在籍しました。日本に帰国した後、再び2000年よりフィラデルフィアにスタジオを構えて制作を開始、過去に上野の森美術館、損保美術館、水戸芸術館、宮城県立美術館などにおけるグループ展覧会に参加しています。作品は絵画、彫刻からインスタレーションに及び、現在はアメリカを基盤に活動制作をしています。

本展では、ドローイングを十数点、手透きの和紙にツリーロビング(フロッタージュ:木や石など、凹凸のある表面の上に紙をのせ、鉛筆やクレヨンなどでこすって模様を写し取る技法。)をほどこし、その和紙で木枝の表面を包んだ立体作品《BOX_》を数点展示いたします。ぜひご高覧いただきますようよろしくお願い申し上げます。

Gallery t



ドローイング作品《一人で立つひと》, 2015
8x12cm, 和紙, 鉛筆, ミクストメディア



ドローイング作品《塔》, 2015
13.4x9cm, トレーシングペーパー, 鉛筆, ガッシュ
塔というイメージはいつも何処かにあって、わたしも繰り返し描いている題材です。人間は高いもののに憧れるのでしょうか？いつか大きな作品も仕上げて見たいなと思っています。

略歴	
1964	神奈川県生まれ
1993	筑波大学芸術専門学群絵画科日本画専攻卒業
1995	筑波大学芸術研究科日本画専攻修了
主な展示	
1996	『いばらきバイアニュアル ディアログス1996 現代性の条件』, 水戸芸術館/茨城
1997	『大邸アジア現代美術』展, 大邸文科芸術センター/韓国 『拡兆する美術'97』, つくば美術館/茨城 『今立現代美術紙展』, 今立芸術館/福井
1998	個展『流通と大地』, カスミつくばセンター/茨城
1999	二人展『自然の印象』, ペンシルバニア大学FOXギャラリー/フィラデルフィア 個展『IMAGE OF NATURE』展, ギャラリーX/ニューヨーク 個展『タイプライター エネルギー』, NEXUSギャラリー/フィラデルフィア 『リーチ ザ ハイト』展, ニューヨークプレデストリアン病院
2000	『イマジナ』, プロジェクトルーム/フィラデルフィア 『和紙の創造』, なかとも現代美術館
2003	個展『メロディー』, ソサイエティーフォーコンテンポラリークラフト/ピッツバーグ 『木の根会議』, 三河芸術祭/ピッツバーグ 『DOMANI』展, 損保美術館/東京 『ダイアログ』展, 宮城県立美術館/宮城
2004	個展『メモリア』, NEXUSギャラリー/フィラデルフィア 『グリーン』展, サイエンスセンター/フィラデルフィア 『ナチュラル』クンステギャラリーエ/バッドミュンヘン, ドイツ
2007	『グリーンマシーン』展, スクリューキル環境教育センター/フィラデルフィア 『アートオブザシティー』展, シティーホール/フィラデルフィア
2008	二人展『コンテンプラティヴ スペース』, ガーシュマンYギャラリー/フィラデルフィア 『ゴーストと影』展, スクリューキル環境教育センター/フィラデルフィア 『トランスプラント』展, アジアン アートイニシアティブ/フィラデルフィア
2009	『オラクルの会話』, CFEVA ギャラリー/フィラデルフィア 『ウインドチャレンジ』, フレイシャーアートメモリアル/フィラデルフィア
2010	個展『屋根のない鳥籠と船』, ISEギャラリー/ニューヨーク
2012	『ハウマッチ ドゥ アイ オウ コウ?』ノーロンガーエンブティアー/ニューヨーク
賞/その他	
1995	三木多門賞 大賞
1997	今立現代美術紙展 大賞
1998-9	文化庁在外研修員
2005	フレデリックマイヤー彫刻公園野外彫刻コンペティション 大賞
2009	パネラー『スーパーフラットを超えて』フィラデルフィア美術館 リーウエイ財団 トランスフォーメーショングラント 受賞
2013	『ウインドチャレンジ』フレイシャーアートメモリアル、フィラデルフィア 審査員

開催概要 展覧会タイトル: 宮森 敬子展『表面なるもの』 展示作家: 宮森 敬子 会期: 2015年4月23日(木)–5月15日(金) 11:00-19:00 / 日・月・祝日 休廊 会場: Gallery t 東京都台東区柳橋1丁目9-11 主催: トーホー株式会社	本件に関するお問い合わせ: Gallery t (担当: 木内) TEL: 03-3862-8549 Email: bstyle-galleryt@toho-beads.co.jp HP: http://www.toho-beads.co.jp/tbs/
Gallery t は、グラスビーズと現代アートとのコラボレーションというコンセプトのもと毎月1回のペースで企画展を開催しております。	